

震災に思ふ（七）

鎮魂のうた（続）

平成二十三年三月十一日、東北東海岸の地震と津波で他界された諸霊に謹んで告げ奉る。

この大災害で御身らは筆舌に尽しがたい苦しみ、地獄の恐怖の中で、かけがいのない命を失はれた。その無念さは余人の察するにあまりある悲痛なものであつた。残された人々の苦しみ哀しみもまた、言語に絶するものであつた。恩愛の情を断ち切られた人々の絶望感は深刻なものであるが、御身らの苦悩もその何層倍にのぼると拝察できる。

しかし、事は終つたのであり、幽明境を越えて私どもは生きてゆかねばならぬ。さう、御身らの生命は不滅であり、この試験を乗り切つて一層高い天界・靈界に進みゆくことになる。願はくは、故郷の同胞が困難を克服して雄々しく生きて行けるやうに、力を貸し給へ。

海辺の町は今ガレキの山で廃墟となつてゐるが、近い将来、以前にも増して美しく力強い風景を取り戻すに違ひない。その復旧・復興への取り組みを導き、日本人の底力の成果を御照覧あれ。

ここに御身らの悪夢の幻を消し去り、永遠に不滅の故郷の情景を再確認して頂くために、懐かしい歌声のいくつかに耳を傾け給へ。そして御身らのありし日々の仕合はせの情景を回復し給へ。

「浜辺の歌」

- 一 あした浜辺を さまよへば、
昔のことぞ しのばるる。
風の音よ 雲のさまよ、
よする波も かいの色も。
- 二 ゆふべ浜辺を もとをれば、
昔の人ぞ 忍ばるる。
寄する波よ、 かへす波よ。
月の色も、星のかげも。

朝に夕に歩いた浜辺は、今も昔の想ひ出を秘めてゐる。月や星の色が変らないのと同様に、海の波も元もとは穏やかで安らぎを与へてくれるのであり、荒れ狂つて見えたのは何かの錯誤であらう。幻影を実像と取り違へてはなるま

い。御身らの懐かしい故郷は、いつでも帰りを待ち続けてくれてゐる。あの山もあの川も、そして父も母も友達も……

「故郷」

- 一 兎追ひしかの山、
小鰯釣りしかの川、
夢は今もめぐりて、
忘れがたき故郷。
- 二 如何にいます父母、
恙なしや友がき、
雨に風につけても、
思ひいづる故郷。
- 三 ころろざしをはたして、
いつの日にか帰らん、
山はあをき故郷。
水は清き故郷。

御身らの大半は「海の子」であつた。生命が海から誕生したやうに、御身らの肉体は元の海に戻つたが、無論靈魂は不滅であり、生き通しである。

「われは海の子」

- 一 我は海の子白浪の
さわくいとそへの松原に、
煙たなびくとまやこそ
我がなつかしき住家なれ。
- 二 生れてしほに浴して
浪を子守の歌と聞き、
千里寄せる海の気を
吸ひてわらべとなりけり。
- 三 高く鼻つくいその香に
不断の花のかをりあり。
なぎさの松に吹く風を
いみじき楽と我は聞く。
- 四 丈余のろかい操りて
行手定めぬ浪まくら、
百尋千尋海の底
遊びなれたる庭広し。
- 五 幾年ここにきたへたる
鉄より堅いかひなあり。
吹く塩風に黒みたる
はだは赤銅さながらに。
- 六 浪にただよふ氷山も
来らば来れ恐れんや。
海まき上ぐるたつまきも
起らば起れ驚かじ。

海の子が海を恐れる訳はない。氷山も竜巻も、そして大津波でさへも。肉体は「助けて！」と叫び、逃げながら波に飲まれはしたが、靈魂はただ波に戯れてゐただけだ。中には、他を助けるのに必死で、自らは波に没した菩薩の慈悲を発揮した御霊がをられたが、遭された同胞だけでなく全世界の人々への福音となる聖なる行動であつた。

「海」

- 一 松原遠く消ゆるところ
白帆の影は浮ぶ。
干潮浜に高くして、
鳴は低く波に飛ぶ。
見よ昼の海。
見よ夜の海。
- 二 島山間に著きあたり、
漁火 光淡し。
寄る波岸に緩くして、
浦風軽く沙吹く。
見よ夜の海。
見よ夜の海。

昼の海も夜の海も、何事も無かつたかのやうに穏やかである。だが、海辺の人々と共に、御身らの悲劇のひとつを忘れた訳ではない。宇宙の歴史は、御身らのありし日の面影を記憶し続けるであらう。たとへ無常の現し世は過ぎ去らうとも。さう、あの優しい母さんは、いつも御身らの傍にゐるから呼べば応へてくれるのだ。そして無論、父さんも……

「みかんの花咲く丘」

- 一 みかんの花が 咲いてゐる、
思ひ出の道 丘の道。
はるかに見える 青い海、
お船は遠くかすんでる。
- 二 黒い煙を はきながら、
お船はどこへ 行くのでせう。
浪に揺られて 島のかげ、
汽笛がぼうと 鳴りました。
- 三 何時かきた丘 母さんと、
一緒にながめた あれ島よ。
今日も一人で 見てゐると、
やさしい母さん 思はれる。

震災に思ふ（八）

岩手県出身の宮沢賢治は、明治三十九年の明治三陸大津波の年（1896）に生まれ、昭和八年の昭和三陸大津波の年（1933）に三十七歳で生涯を閉じた。東北の大地で生活する貧しくつましい人々に限らない愛情を注いだ賢治の詩を「六月一日」号に掲載し、今回の津波で他界した人々への鎮魂のうたとしたが、この「七月一日」号では、谷村新司作の「群青」を死者たちに捧げたい。これは戦争で散華した息子を老いた親が海辺で忍ぶ歌であるが、その心は大震災で家族や友人・知人を喪った人々と同じだからである。

群青 吉青

- 一 空を染めてゆく この雪が静かに
海に積りて 波を凍らせる
空を染めてゆく この雪が静かに
海を眠らせ あなたを眠らせる
手折れば散る 薄紫の
野辺に咲きたる 一輪の
花に似て儚きは 人の命か
せめて海に散れ 想いが届かば
せめて海に咲け 心の冬薔薇
- 二 老いた足どりで 想いをめぐらせ
海に向いて ひとりただずめば
我より先に行く 不幸は許せど
残りて哀しみを 抱く身のつらさよ
君を背負い 歩いた日の
ぬくもり背中に 消えかけて
泣けとごとく群青の 海に降る雪
砂に腹這いて 海の声を聞く
待つていておくれ もうすぐ還るよ
空を染めて行く この雪が静かに
海に積りて 波を凍らせる
空を染めてゆく この雪が静かに
海を眠らせ あなたを眠らせる

震災直後の海外からの 主な支援と活動内容

日本の被災地に世界中から支援の手が差し伸べられたが、外務省のまとめでは、135ヶ国・地域が支援を表明し、そのうち20ヶ国・地域から救助隊や医療隊、原子力専門家が現地入りし、39ヶ国・地域が毛布や食料品などの物資を届けた。外務省を通じて支援以外にも、各国赤十字社や民間団体などから義捐金や物資が寄せられた。（4・14現在）

主な支援チームの活動内容は次の通りであつた。（ ）内は活動期間。

- アメリカ（3・15～3・19）
救助隊員144人、救助犬、岩手県大船渡市、釜石市
- 原子力規制委員会専門家 11人
エネルギー省 34人 東京都、横浜基地、福島県
（3・13～4・14）
米軍2万人態勢、艦船20隻、航空機160機
「トモダチ作戦」
- 韓国（3・14～3・23）
救助隊員107人、救助犬2匹、仙台市
- 台湾（3・16～3・18）
救助隊員28人、宮城県名取市、岩沼市
- 中国（3・14～3・20）
救助隊員15人、岩手県大船渡市
- ロシア（3・16～3・18）
救助隊員・第一陣75人、第二陣80人、宮城県石巻
- モンゴル（3・17～3・19）
救助隊員12人、宮城県名取市、岩沼市
- シンガポール（3・13～3・15）
救助隊員5人、救助犬5匹、福島県相馬市
- オーストラリア（3・16～3・19）
救助隊員75人、救助犬2匹、宮城県南三陸町
- ニュージーランド（3・16～3・18）
救助隊員52人、宮城県南三陸町
- インドネシア（3・19～3・23）
救助隊員11人、事務員、メディカル4人 宮城県
気仙沼市、塩釜市、石巻市など

- インド（3・29～4・6）
支援隊46人、宮城県女川町
- メキシコ（3・15～3・17）
救助隊員12人、救助犬6匹、宮城県名取市
- イギリス（3・15～3・17）
救助隊員77人、救助犬2匹、岩手県大船渡市
- ドイツ（3・15～3・15）
救助隊員41人、救助犬3匹、宮城県南三陸町
- フランス（3・16～3・23）
レスキュー関係者134人（モナコ人11人を含む）
宮城県名取市、青森県八戸市
- スイス（3・14～3・16）
救助隊員27人、救助犬9匹、宮城県南三陸町
- イタリア（3・16～3・21）
調査ミッション6人（捜索救助、原子力安全などの
専門家）、東京都
- トルコ（3・20～4・8）
救助隊員32人、宮城県多賀城市、石巻市、七ヶ浜町
- イスラエル（3・29～4・10）
医療支援チーム53人、宮城県南三陸町
- 南アフリカ（3・19～3・25）
救助隊員45人、宮城県岩沼市、名取市、多賀城市、
石巻市

これ以外にも多くの国々が、避難生活に必要な物資、缶詰、下着などを送ってくれたり、医療活動などをしてくれた。ケニアの少女たちは、涙を流しながら津波犠牲者を悼む歌を合唱してくれ、ジャカルタの看護師・介護福祉士候補者の人たちは貧しい生活の中から14万円寄付してくれた。日本に住む多くの外国人が被災地に向き、炊き出しなどのボランティアをしてくれた。

約5億5千万円の緊急支援予算を組んだタイのアピシット首相は、「日本はこの50年間、タイの発展に重要な役割を担ってきた。タイが恩に報いるのはこの機会だ」と語っている。

たしかに、これまでわが国は国際社会に多大の貢献をしてをり、そのために苦難の時に多くの国々が支援の手をさしのべてくれてゐる。今後も世界にすべての人々の幸福を願つてさまざまな援助を続けて生きたいものである。わが国建国の理想は「八紘為宇」、世界は一家・人類はみな兄弟、といふ精神なのだから。

（中島英迪）